

国家の成立に伴い、問題の解決に暴力を用いる行動理念が社会の軸になっていった。

～以下、松木武彦「日本の歴史― 列島創世記」〈抜粋〉～

(文中の太字は引用者による)

#### 弥生の対人観と行動理念

そこで注目されることになるのが、弥生時代とされる段階に新たに現われる(引用者:水田のほかの)もう二つの要素、すなわち**武器と環濠**である。先に触れたように、すでに縄文時代後期以降、剣や刀の形をした磨製石器があり、それをふるう人の力や権威を、見る人の心に呼び起こしていた可能性が高い。しかし、それら**縄文時代の石剣や石刀は、先端は丸みを帯び、両側縁に刃が研ぎ出されていないので、それで実際に人をあやめるのは難しいし、そのような使われ方はしていなかった**だろう。

それに対して、**水稻農耕とともに朝鮮半島から伝わってきた武器は、先端は尖り、両側縁には鋭い刃が研ぎ出されている**。福岡県志摩町の新町遺跡では、大腿骨に後方斜め上から磨製石鏃が突き刺さった熟年男性の人骨が発見されていて、実際に人に向けて使われていたことが明らかだ。人を殺傷するための専用の武器をつくり、それを使って人を殺す行為が、水稻農耕とともにもたらされたということである。その後、武器は列島内でつくりつづけられ、それが刺さったり、それで傷つけられたりした人骨の確実な例も、北部九州を中心に三〇体ほどにのぼる。

いっぽう、**環濠は、外敵の襲来から生命と財産を守るという目にみえる役割とともに、自分たちとほかの人びとを厳然と分けようとする思考の表われであり、そのことをメッセージとして物質世界に表現したもの**でもある。環濠もまた、九州から関東までの広い範囲で、弥生時代の終わりに至るまでつくりつづけられた。

以上のように、**水稻農耕とともに伝わった武器と環濠とが、弥生社会のなかでつくりつづけられたことは、人を殺すための道具をつくり整えるという行為にみられる対人観や、問題の解決に暴力を用いたり、それに備えて守りを固めたりする行動理念が、社会の軸になっていった**状況を示すものだろう。このような対人観や行動理念をもった社会は、内部においては利他主義が強く、外部に対してはたやすく敵意をむきだしにする傾向が強い。つまり、集団の存続のためにみずからの生命を犠牲にすることをいとわない個体が存在し、その精神的な代償として、そのような個体を美化するイデオロギーをもった文化が成立しているのである。文化、すなわち知が、生物本来の欲求とは逆の行動を個体にとらせるという、ホモサピエンスだけが生み出すことのできる特異な社会だ。

#### 縄文と弥生の心と社会

このような対人観と行動理念は、耕地の開発や灌漑の整備を伴う本格的な農耕と、心の働きにおいては同じところに根ざしている。

フランスの考古学者ジャック・コーヴァンは、地中海東岸のレヴァント地方に農耕が根づいていく過程で、動物に乗った人物像など、ほかの生命に対する支配を連想させる彫像その他の表現が出てくることに注目した。コーヴァンは、周囲に対するこのような支配的性向が、環境や植物の生命を完全に統制することによって実現する農耕という行ないと、同一の心の働きから出てくるものとみる。すなわち、人工物に猛々しさを表現することと農耕することとは、周囲の自然やほかの人びとと自分たちとの関連づけ方という、知の根本において共通するというわけだ。

**縄文の文化と弥生の文化とのもっとも本質的な違いは、このような支配的性向が、そのもとになる知の根本にあるかどうか**という点だろう。縄文社会は、たくさんの人口をもった大きなムラやモニュメントのような複雑な人工物を生み出したにもかかわらず、少数の人びとを頂点とする階層的な社会や、広い範囲での政治的な統合をつくりださなかった。その理由は、社会を織りなしていく人びとの思考や行動に、**経済上の独占や政治上の統制につながる支配的な要素が含まれていなかった**ためと考えられる。

反対に、弥生時代以降、**階層化や政治的な統合が進み、ついに王や貴族を頂点とする古代国家が完成**した要因は、人びとの思考や行動に宿った支配的性向が、経済上の独占や政治上の統制を積極的に推し進める方向に働いたからだろう。農耕が階層化や政治的統合を生み出すという一方的な関係ではなく、人びとの心の支配的な性向が農耕という行為を導

き、それによる富の拡大とそれをめぐる競争が階層化や統合を後押しする、といった双方向の力が、弥生時代以降の社会変化を強く推し進めたのである。

<以上で抜粋終わり>

このようにして成立した国家（**権力機構＝統治支配体制**）は弥生時代の終わりごろから強化されていき、それに伴い「**戦いを忌避する精神（なにより命を大切にし知恵により争いを解決せんとする精神）**」は否定されていきました。これは残念ながら歴史的事実です。かかる歴史的事実を神話という形で描いたのが「**生駒の神話**」（下記URLをクリック）ですが、この神話は同時に、「戦いを忌避する精神」（縄文の精神＝長髓彦の精神）は必ず復活するとの希望を後世の人々にあてたメッセージとなっています。

<http://ikomashinwa.cocolog-nifty.com/ikomanoshinwa/>

<ご参照>

生駒の神話（国譲り神話と長髓彦神話）<大要>（<http://v1.cocolog-nifty.com/blog/files/1.pdf>）